

P9-281

「家に帰るなら今日」を支援した一事例 パート1 —病棟看護師の役割—

姫路赤十字病院

○横田 裕美子¹⁾、田路 綾²⁾、天野 愛子³⁾、山田 道代⁴⁾

当院は姫路市において、503床の急性期医療を担う病院である。地域医療連携の必要性の中で、病棟看護師は退院計画を実施し、患者が安心して次の療養場所へ移行できるように支援を行っている。今回、積極的治療目的の入院であったが、ターミナル期に移行した患者の退院支援に関わった。病状が急激に悪化する中で在宅での看取りを決断される過程に寄り添い、1.患者の気持ちを敏感に汲み取り、タイムリーに退院支援を行うこと、2.直接ケアを行う看護師間の看看連携の重要性を再確認できたのでここに報告する。〈事例紹介〉A氏は2009年4月下旬、成人T細胞リンパ性白血病と診断され、治療目的で当院に転院してきた。家族には医師より、治療を行えば半年、治療しなければ1ヶ月と余命が告げられていた。A氏は決して弱音を吐かず、前向きに治療に取り組んでいたが、肺炎・敗血症・心不全を併発し、病状は悪化の一途をたどっていた。診断から約3週間後、全身状態が悪化し、呼吸困難に対する麻薬の使用の説明を行った際、A氏が「もう頑張ったから家に帰る」という気持ちを伝えられ、家族もその思いに同意された。医師・看護師はその意思を汲み取り、自宅に帰る支援をしようと決めた。「帰るなら今日しかない」という医師の見通しを受け、退院調整看護師への連絡、病棟カンファレンス、看護サマリーの作成、麻薬の持続皮下注の開始など病棟スタッフが一刻も早い退院に向け、一丸となって準備を行い、その日のうちに退院することが出来た。移動中の看取りの可能性も考慮し、病棟看護師が患者・家族と共に付添って帰宅した。帰宅後、在宅において医師・訪問看護師へ情報提供を行い、医療・ケアについて引き継いだ。翌日朝、家族に見守られ、自宅で永眠された。

P9-283

耳鼻咽喉科における放射線治療の外来導入の取り組み

姫路赤十字病院 外来¹⁾、5階西病棟²⁾、耳鼻咽喉科³⁾、放射線科⁴⁾、看護部⁵⁾

○田中 弘子¹⁾、大泉 万里子¹⁾、村上 静¹⁾、若松 良子²⁾、小嶋 奈津子²⁾、中田 道広³⁾、浅井 洋子⁴⁾、松井 寛⁴⁾、三木 幸代⁵⁾、坂本 佳代子⁵⁾

【はじめに】当院耳鼻咽喉科では頭頸部の放射線治療の多くは入院管理下で行われていた。それは、口腔や咽頭全体または一部が照射野に含まれる場合は、有害事象の発生が著しく、特に粘膜炎・口内炎は症状が悪化した場合は、生命を脅かす危険性が挙げられるからである。そのため、放射線照射量は60～70Gy (2Gy/回)で、約2ヵ月の入院期間を要していた。しかし、有害事象が30Gyを超えるまでに日常生活を障害するまでに至るケースは少なく、放射線治療の開始は外来通院で可能と考え導入を試みた。

【方法】対象者：12名 期間：平成20年8月～11月 患者に事前に放射線治療法を受けている期間に起こりうる状況をパンフレットを用いて説明し、生活指導を行う。来院時に症状チェック指標をもとに聞き取りで行いながら、症状の進行により、入院移行を速やかに行う。

【結果】対象者12名中、外来で終了11名。12名にパンフレットによる指導を行ない、そのうち7名の患者に通院中の状況について有害事象のチェックと在宅療養状況の聞き取りをした。食事摂取困難と口腔内の疼痛等で入院に至る重篤な有害事象が出現したケースはなかった。

【まとめ】患者は生活と治療をうまく融合させ、生活されていた。治療中の症状は入院の指標にしていた有害事象はなかった。看護師は、毎日の関わりで些細な変化も察知でき、症状に応じた生活指導を行うことで、その人らしい生活の支援につながった。

P9-282

赤十字医療施設東部ブロック「がん化学療法看護学会」実践報告と課題

成田赤十字病院¹⁾、横浜みなと赤十字病院²⁾、長岡赤十字病院³⁾、武蔵野赤十字病院⁴⁾、芳賀赤十字病院⁵⁾、水戸赤十字病院⁶⁾

○篠木 貴子¹⁾、山口 静²⁾、白井 直美³⁾、栗林 由理恵⁴⁾、小幡 実佐子⁵⁾、川和 悦子⁶⁾

【目的】がん看護の質の向上を目的とし、がん化学療法看護認定看護師による年4回の学習会を開催した。学習会の参加者からの評価を基に、今後の学習会のあり方を検討する。

【対象と評価方法】学習会の参加者に対し、毎回アンケート調査を実施し、最終回は参加者から学習会に対する感想や意見を自由に話してもらった。

【結果】参加者平均人数24.3名(出席率82.7%)。各回とも学習会のテーマに対する興味は「強くある」又は「ある」と全員が回答していた。資料、所要時間、内容、理解の程度、臨床への活用しやすさに関する適切さに対しては、8割以上が「非常に良い」「良い」と回答していた。また、次年度の学習会について、参加者の9割が「引き続き参加したい」「他のスタッフにも勧める」と回答し、「薬剤に対する知識不足があり、理解するのが難しかった」「知識をふまえて今後どのようにしていけば良いのか明らかになった」「みんなに伝えていきたい」等の声が聞かれた。

【考察】参加者のニーズやレディネスを考慮した学習会の開催は、日頃のがん化学療法看護の知識や技術を振り返るとともに、新たな学びを得る良い機会となっていた。しかし、施設の規模や設備、参加者の経験年数等が様々であるため、分かりやすい表現や代替方法を提示していく等の工夫が必要である。また、講義形式が受け身型の学習会であったため、今後は参加型の学習会を企画し、参加者の主体性を引き出す講義を行っていききたい。その為にも参加者のニーズを把握し、より良い学習会の実施、がん化学療法看護の質の向上に努めていきたいと考える。

P9-284

放射線療法を受ける患者への口腔ケア介入の現状と課題

名古屋第二赤十字病院 看護部

○高柳 杏里¹⁾、西村 麻里¹⁾、阿部 真弓¹⁾、熊澤 マサ子¹⁾、加藤 洋子¹⁾

【はじめに】米国立がん研究所(NCI)では、口腔領域が照射野に入る放射線治療を受けた頭頸部癌患者の100%に口内炎を中心とした口腔合併症が生じると報告している。当病棟は口腔外科を含む混合病棟であり、放射線療法を受ける口腔外科疾患患者にも口内炎などの口腔トラブルが必発し、患者にとって大きな苦痛となっている。しかし、当病棟では放射線療法を受ける患者への口腔ケアのマニュアルは存在せず、勉強会も開催されていない。そのため、口腔ケアは看護師個々の知識や経験年数により差が生じている現状である。そこで、統一された口腔ケアの知識や技術の提供が必要であると考え、今回、放射線療法を受ける患者に対する口腔ケア介入の現状を把握し、問題点を明らかにするため質問紙調査を実施した。さらに、勉強会による教育的介入により看護師の口腔ケアの意識変容を調査したため報告する。

【研究方法】当病棟看護師26名を対象に質問紙調査を実施。質問紙調査は無記名質問紙法とし、勉強会前後の計2回行った。その結果を比較し、口腔ケアへの意識変容を分析する。

【結果と考察】放射線療法を受ける患者に対する口腔ケアへの関心は高く、約90%の看護師が口腔ケアの必要性を感じている。その反面、口腔粘膜炎の段階に応じた具体的な口腔ケア方法の知識が不足しており、疑問を持ちながら介入している現状であった。勉強会内容は、頭頸部患者の放射線副作用、口腔粘膜炎の段階に応じた当病棟での口腔ケア方法等について行った。その結果、看護師の知識が向上し、意識を変容も図ることができた。今後は患者への口腔ケア介入での実践評価を行っていく必要がある。